第２部　町家を活かしたまちづくりへ向けた考察と提言

上越市創造行政研究所

市民研究員　磯田　一裕
〃　木村　雅俊
〃　佐藤　和夫
〃　菅原　邦生
〃　関　由有子
〃　鳥原　友樹
〃　中村　　孝
〃　廣田真知子

第１章　高田のまちのストーリー

1－1　町家からみた“まちの生業”の変遷（1）

～高田の「まちの形」から「町家を活かしたまちづくり」の手がかりを考える～

（担当：市民研究員　佐藤　和夫）

今回の研究テーマである「町家を活かしたまちづくり」（高田地区に限定）を考えるうえで、明治・大正・昭和の高田のまちの変遷を『越後高田商業地図』『北越商工名鑑』『新潟県肖像録』などの地図や写真資料から見ることによって、そのヒントを探りたいと思います。

1．城下町高田の成立

高田城は、春日山・福島城の政治・経済の機能を収斂する形で慶長19年（1610）松平忠輝によって築城されました。しかし忠輝は業半ばにして改易、寛永元年（1624）に入封した松平光長の時代に至って、ようやく現在のような城下町が確立したといわれています。以降、榊原氏130年の統治によって明治維新を迎えることになります。

城を中心に武家地を配し、それを取り囲むように城下町が作られました。その城下町の中心として城の西側に南北２kmにおよぶ３本の通りを作り、現在の本町通りには北国街道を通し、メインストリートとして商業地域に、仲町通りは肴屋、桶屋などの職人町、大町通りは武具等の職人を集住させています。また城下町の一番西側には、やはり南北２kmにもおよぶ寺町が作られています。

2．まちの賑わいと変貌

江戸時代の高田のまちの賑わいはどのようだったのでしょうか。

『高田市史』（布施秀治著・大正３）には、高田の祇園祭に引き出された各町内の飾山車（かざりだし）の写真があります。飾山車は江戸時代末期まで祇園祭に引き出され、祭りの盛大さと、28基の山車の上に乗せられた、写真に見えるような飾りの名称は『頸城郡史稿』にも書かれています。

このような豪華な飾山車を各町内が引き出し、町々を練り歩いた、当時の町衆の経済力の大きさが十分に想像できます。

このような高田城下が明治維新によって藩の庇護を離れ、どのようにして変貌していったかを前述の資料によって見ていきます。

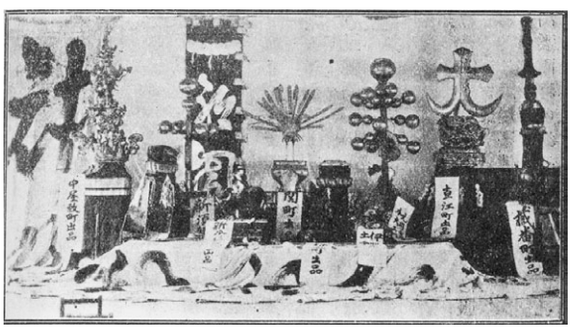


図 1-1　展示会に出品された各町内の山車飾り

出所）高田市史（大正３）

3．資料について

(1)　『越後高田商業地図』（以下「商業地図」）

明治39年（1906）に高田町字呉服町（茶町）の高橋書店（印刷・中小町高橋石版所）によって発売されたもので、大きさは、ほぼ75cm角、多色刷りで、中心に高田城跡と旧高田城下全図を置き、まち筋をばらばらにし、全図を取り囲むようにして配置し直し、町のつなぎ目は○や△などの記号で照合してつなぎ合わせるようになっています。

稲田を含めた現在の市街地がほぼ掲載されていますが、商業用地図という性格上、寺町は掲載されていません（但し全図には掲載されている）。

地図は建物を「短冊」状に区切って、その中に職種や店名などが記載されています。よく見ると

①職種名

②職種名・店名

③屋号・職種名・店主名

④全図中に店名を記載、地図の空きに店名を記載

のように分類することができ、それにともなって店舗の大きさも異なっています。それについて地図の緒言は、②③は「資力充実ニシテ最モ信用アル営業者ナリ」また④は紙面の都合上地図を省いているが「営業頻繁ニシテ多大ノ信用アルモノハ記載」したと述べています。以上のことから、この図は現在市販されてい

る「市街図」のようなものではなく、スポンサーを募って、その金額の多寡により記載内容および店舗の大きさを変えていると想像されます。

しかし、基本の「短冊」の幅を辻と辻の間などでうまく調整して、地図全体の正確さを保っており、現在のまちの景観とほぼ一致していることが分かります。

⑵　『新潟県肖像録』（以下「肖像録」）

大正13年に鳥取県倉吉町の博進社によって発行されたＢ５判・上製本、新潟全県を網羅する写真による「紳士録」です。

「契約規約」として写真の掲載料が４段階に分かれ、契約に応じて掲載スペースが決められています。「肖像録」とされているため、写真には店頭に店主や店員、家族が撮されているものがほとんどで、中には肖像写真だけのものもありますが、当時の店の外観や店内の様子を知る良い手がかりになるものが多数あります。

（明治22年発行の『北越商工名鑑』（以下「名鑑」については、「歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書」（平成13年3月　上越市創造行政研究所）を参照）

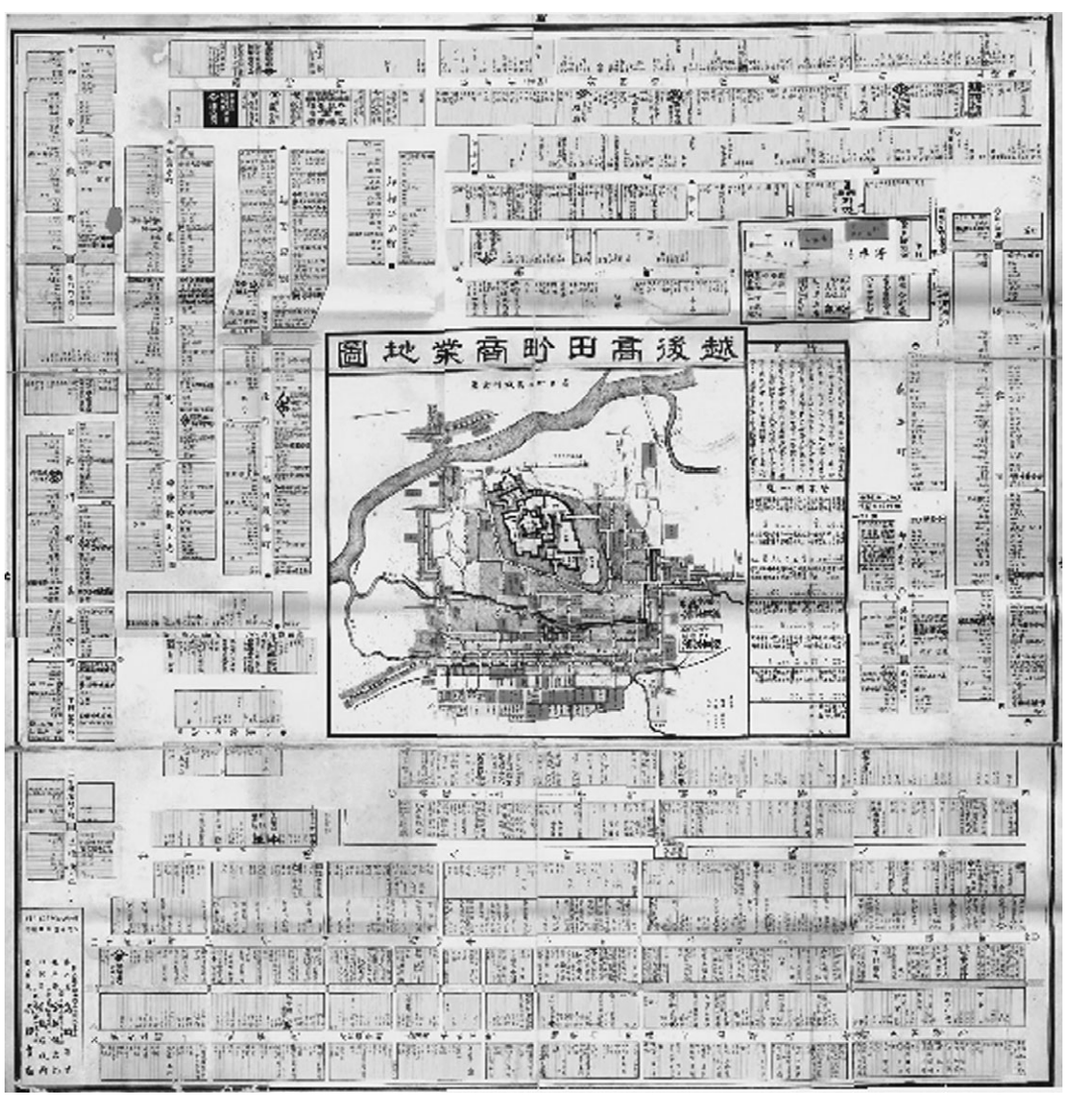


図 1-2　越後高田商業地図の全体

4．本町通りに見るまちの生業

中心市街地である現在の本町通りを「商業地図」によって見ると（判読可なもののみ）、直線２㎞の現本町通に合計、総職種305、軒数417（内訳は表1-1）の商店が並んでいたことが分かりますが、前述のようにスポンサーとならなかった店もあると思われるので、それを加えれば総数はさらに多くなるはずです。

表1-1　越後高田商業地図でみる本町通りの職種と軒数

旧町名	現在の町名	職 種	軒 数
堅春日	本町１丁目	44	60
府古町	本町２丁目	40	33
横町	本町２丁目	12	25
呉服町（茶町）	本町２丁目	29	61
呉服町	本町３丁目	29	37
上小町	本町４丁目	49	67
中小町	本町５丁目	44	58
下小町	本町６丁目	35	53
下紺屋町	本町７丁目	23	24
計		305	417

城下町の特色として同業が集住していますが、上記のように多様な職種があるのは、本町通りが他の町内とは違って、北国街道が通るメインストリートとして、商業地区だったためだと思われます。（横町のように貸席が12軒も集中するのは、特殊な事情によるものです）。

明治以降は、新規転入の店、または他町から支店を出す店、逆に横春日町、現南本町へ新しい店舗を求めて出で行った例（南本町の光山印刷所は明治20年代に本町通りから現在地に出店）ということがあったようです。

「商業地図」には、石版印刷所・洋品・時計・石油・ランプ・銀行・生命保険会社・医師など、明治以降に入ってきた職種もあります。

この「商業地図」は前述のとおり中小町の高橋石版所印刷で印刷されています。

また弾薬商や工芸品輸出商という珍しい職種や諸公債売買などという職種もあります。なかで注目されるのは、現在の岩の原葡萄園の前身である日本葡萄酒株式会社が中小町にあり、「商業地図」には菊水のマークが付けられています。（図1-3中央下）

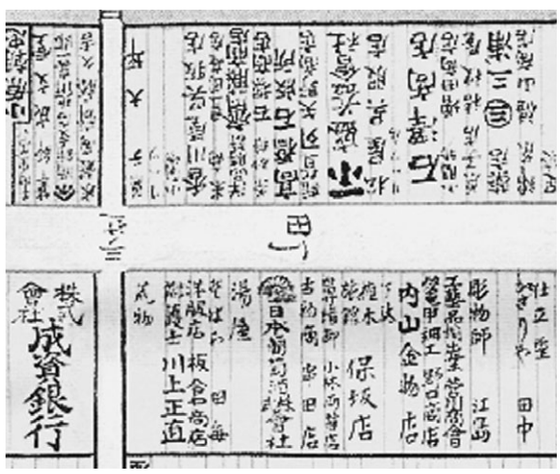


図 1-3　越後高田商業地図に残る菊水のマーク

明治31年に高田にもたらされた「バテンレース」は全町内にわたって名前が見られますが、本町にはその製品の集出荷の代理店が何軒かみられます。

なお「肖像録」にスキー製造業や自転車・自動車業が掲載され、「商業地図」には無いので、それらは「商業地図」の発行された以降に高田に入ってきたことが分かります。

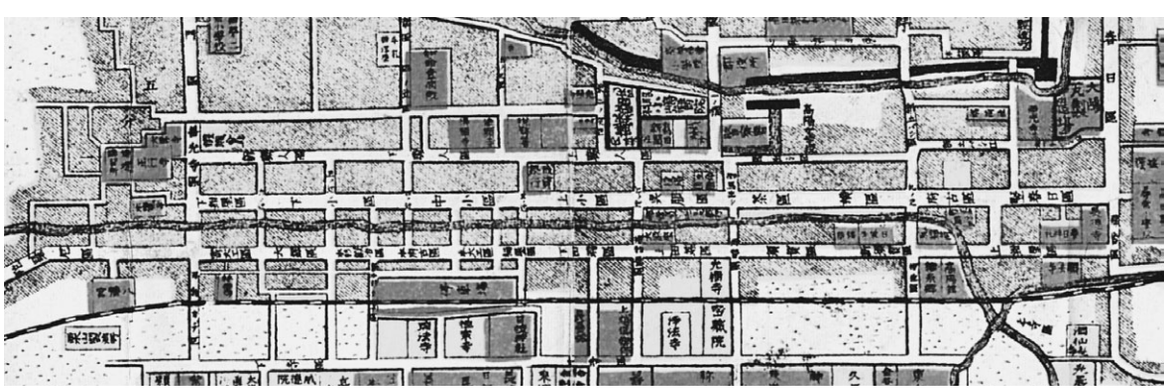


図 1-4　越後高田商業地図でみる高田中心市街地

5.「肖像」と「名鑑」に見る
まちの生業と家の形（その１）

図1-5は、『高田市史』（大正３）掲載の雁木の写真で、手前の看板の高橋書店は「商業地図」の発行所です。

その奥隣りの「寿し」の看板は、当時高田随一といわれた「山川亭」の看板です。

図1-6は「肖像録」掲載の高橋書店で、写真左には「国定教科書取次販売所」の看板がみられ、この看板は図1-7の「名鑑」にもみることができます。

図1-11の「名鑑」と図1-12の「肖像録」を比較すると、大変よく版画として再現されていることが分かります。

右側の角になっている部分は、横町の道が広くなるところで、「商業地図」でもここから道幅が広くなっています。この下（しも）並びには、直心影流倉地道場の他、蕎麦屋、喜楽亭、巫山亭・牛安という有名な牛肉料理屋があります。

図1-5　高橋書店
出所）高田市史より

図1-6　高橋書店
出所）「肖像録」より

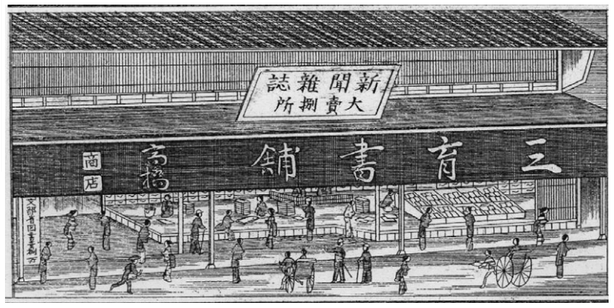


図1-7　高橋書店
出所）「名鑑」より

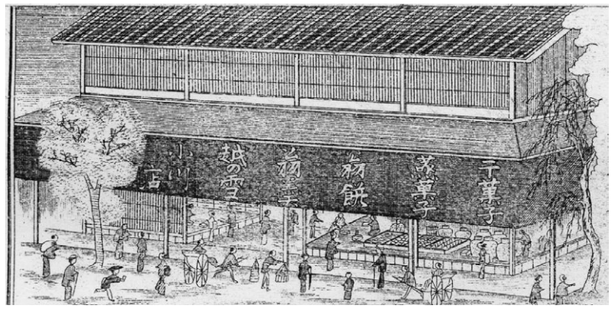


図1-11　小川菓子店
出所）「名鑑」より

図1-12　小川菓子店
出所）「名鑑」より

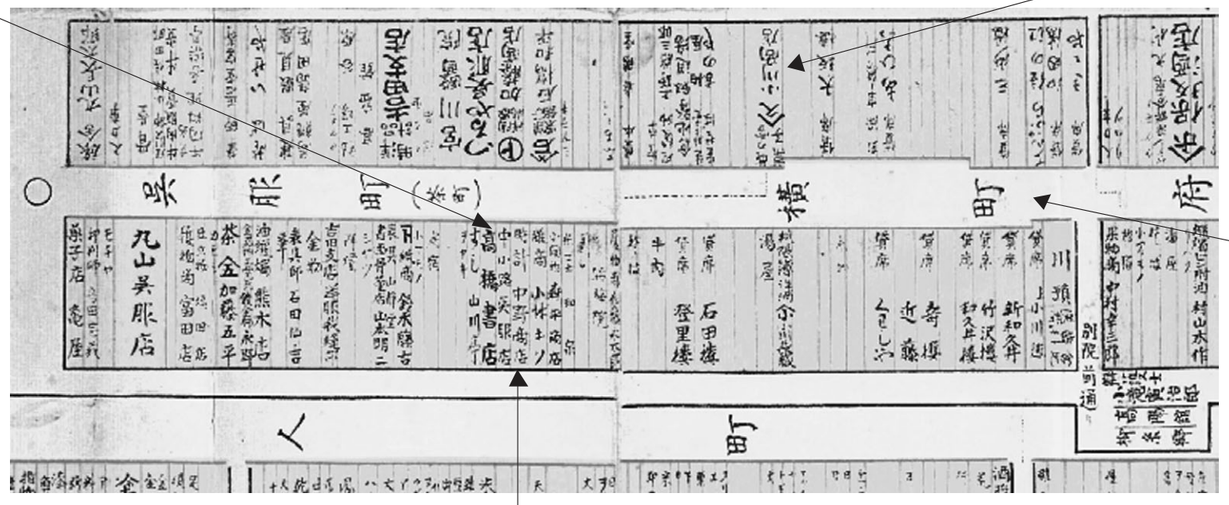


図1-13　横町の植木市の賑わい
出所）高田市史（大正３）より

図1-8は町家の外観がよく分かり、右隣りに３階建ての家が見えます。図1-9の店内には時計やモダンな蓄音機が並び、左側が奥へ続く庭になっていることが想像できます。

図1-10の「名鑑」の看板は「仲長」と主人の名前を織り込んだ屋号ですが、図1-8の「肖像録」では「中野」となっていたり、雁木がコバ（板）葺きから瓦に替わっているようですが、これらは、両者にある36年の時間差なのか、または版画の省略なのかは検討の余地があります。

蛇足ながら、写真の看板に「廛」と「店」があるのも注目されます。

図1-8　時計　中野商店
出所）「肖像録」より

図1-9　時計　中野商店
出所）「肖像録」より

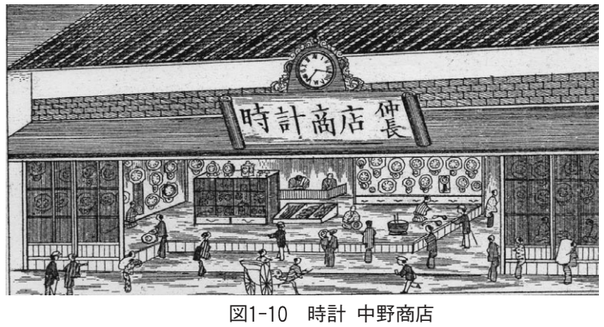


図1-10　時計　中野商店
出所）「名鑑」より

6.「肖像」と「名鑑」に見る
まちの生業と家の形（その２）

右手のショーウインドウ風の部分にパラソルが飾られ、町家と洋物商品のディスプレイが不思議な雰囲気を醸し出しています。（図1-14）

図1-14　トモエヤ洋品店（下紺屋町）
出所）「肖像録」より

雁木の機能をそのままにバルコニーを付け、店先をタイル張りにするなど、流行の先端の肉屋らしい外装に設えています。

図1-15　いろは肉店（中小町）
出所）「肖像録」より

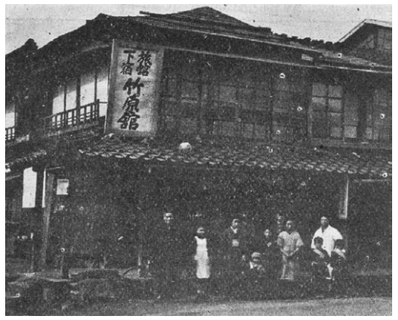
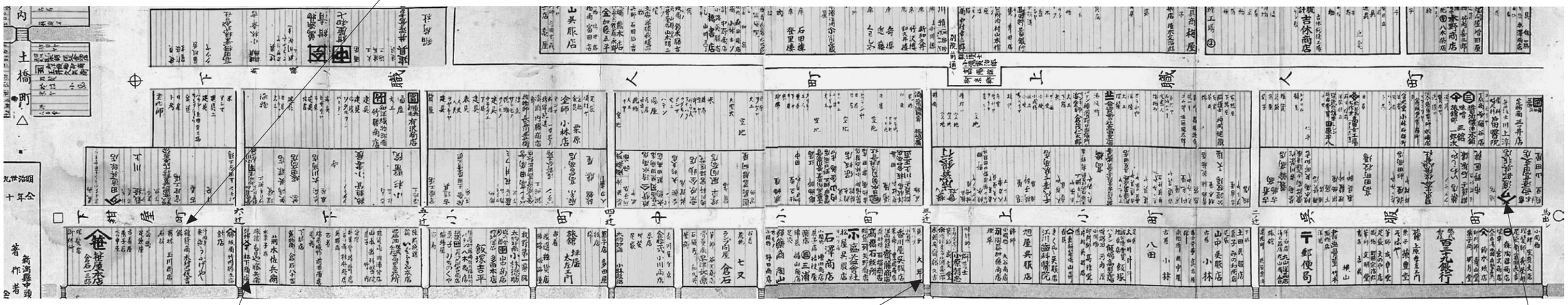


図1-16　竹原旅館
出所）「肖像録」より



洋酒・乾物等が売られていました。雁木には当時流行の豪華な銅板製の「エビスビール」の看板が上がっています。（図1-17）

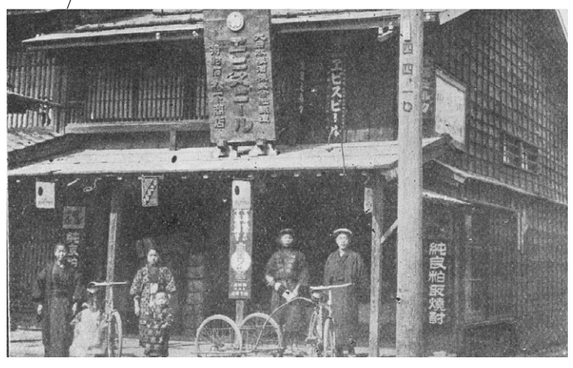


図1-17　松下商店（六ノ辻）
出所）「肖像録」より

図1-18　大坪菓子店（三ノ辻）
出所）「肖像録」より

この頃になると自転車が商売に欠かせない「自家用車」になっていることがよく分かります。（図1-18～20）

図1-18の写真左には「郷社　日枝神社」の石柱も見えます。

図1-19　五反田京染店（上小町）
出所）「肖像録」より

図1-20　渡部呉服店（呉服町）
出所）「肖像録」より

7．まとめ

以上、「肖像録」「名鑑」を「商業地図」によって見てくると、ほとんど町家の構造を持った建物の中に旧来の商売だけではなく、明治以降流入してきた新しい職種も展開している様子が分かります。

「名鑑」明治22年、「商業地図」39年、「肖像録」大正13年という時代の違い、また、どの資料も広告誌（紙）としての性格上、高田のまちの全貌をつかむわけには行きませんが、２kmにおよぶ本町通の職種を見ると、多様な職種が生産よりも消費都市としての性格を強くしていることが分かります。そのような消費都市としての賑わいは、多少の職種の変化はあっても昭和30年代まであったことは確実です。

このような高田の経済力は、さまざまな文化を生み出し、太平洋戦争中に多くの文化人の疎開を受け入れ、昭和20年代の一時期、高田文化サロンあるいは高田文芸サロンという時代を出現させました。それは敗戦に打ちひしがれた人びとに大いに夢と希望を与えました。

しかし、昭和30年代から急激に始まった高学歴化による首都圏への人材の流出、40年代に至って日本中を席捲した高度経済成長の波は、消費者の意識を変えて、50年代には郊外型大型ショッピングセンターを進出させます。

また生活意識の変化による中心市街地の住民の郊外への移転を招き、中心市街地の空洞化と住民の高齢化が始まることになります。

一方、それは皮肉にも“結果として”良好な町家を残すということにもなりました。

かつて、高田藩以来の「越後系型染め」といわれる藍染めや、明治になって一声を風靡したといわれる「高田縞」、一時期高田の経済を担ったバテンレースとその素材を供給するブレード工業（先端的化学工業へ転進した会社もある）、スキー工業、また各種伝統的手工芸がありました。

しかし、それらが高田の地場産業として発展、あるいは伝統産業として生き続けていくことができなかった原因はどこにあるのでしょうか。

まちの外観を眺めただけで、僅かのサンプルの中から強引に結論を導き出すのは大変危険ですが、失われたことへの懐旧や単なる批判ではなく、昭和30年代が豊かな思い出の世界としてブームになりつつある今こそ、その原因を追求することで、まちの再生あるいは再活性化への手がかりを見つけ出し、〈まちへ帰り「町家に暮らす」快適さ〉を再発見するヒントを得ることができるのではないでしょうか。

参考文献

・『高田市史』布施秀治著（大正３年）
・『高田市史』高田市史編集委員会
・『高田富史』宮川頼徳著（明治34年）

1－2　町家からみた“まちの生業”の変遷(2)

～大町五丁目の町名と生業の変遷からみる、まちの物語～

（担当：市民研究員　中村　孝）

高田に町家が形成されたのは高田城が築城された頃ということになりましょう。福島城下から連れて来られた商家や職人の人たちがお殿様に指示された地域に住み着くことになったのが高田の町家の始まりです。

残念ながらその当時の都市計画に関する文書、絵図面などは発見されていないと聞いておりますが、残されている高田城下の古い絵図面を見ると、様々な職人や町人たちで賑わう高田のまちの姿が目に浮かびます。

これからの町家を活かしたまちづくりを考えていく上では、このような高田のまちが持っている歴史的な背景をおさえ、それらの物語を上手く活かしていくことが大切になると思います。

今回の私のレポートでは、このような観点から、高田のまちの生業の変遷について、現在も古い町家や雁木が比較的多く軒を連ねている大町五丁目を題材としてみていくことにします。

図1-21　大町五丁目の町並み①

図1-22　大町五丁目の町並み②

1．町名の変遷でたどるまちの歴史

江戸時代の高田城下の絵図面を見ると、伊勢町、下小町、鍋屋町など、今でも耳にしたり、まちの路傍の碑（いしぶみ）に刻まれている町名に出合うことができます。ここでは、まずはじめに、大町五丁目の町名の変遷をたどり、この町内の人たちがどんな町（まち）の名のもとに暮らしてきたのかをたどることにします。

(1)　使用した資料について

今回、町名の変遷をたどるために主に利用した資料は、以下の資料です。

・上越市史普及版「新旧町村名対照表」
・上越市史資料編４　近世一付図「高田城下町絵図　松平光長時代（延宝期）」（以下「松平時代地図」）
・　　同上　　「高田城下町絵図　榊原時代（幕末期）」（以下「榊原時代地図」）
・上越市史資料編６近代 付図「越後高田町商業地図」（明治39年）（以下「商業地図」）
・「高田市町名改称新旧対照図」（昭和５年）（以下「新旧対照図」）

これらの資料は、どなたでも入手できる資料なので、これからのまちづくりにおいても、まちの歴史をたどる一つの資料として是非活用してみることをお勧めしたいと思います。

(2)　江戸時代中期

松平光長（1624入封～1681改易）の時代には、このまちは下職人町と呼ばれていました。ただし「高田城下町絵図」によれば、大町通りの西側にしか町家はなく、東側は武家屋敷となっていたようです。武家屋敷と通りの間には掘割のようなものがあり何ヶ所か橋が架かっています。このような、町割りからみて、おそらく武家屋敷は裏口を大町通りに向けていたのではな

いかと推察されます。

図1-23　江戸時代中期の大町五丁目付近
出所）上越市史「松平時代地図」

⑶　幕末期

次に幕末期（榊原時代）の「高田城下町絵図」をみると、現在も同町にある「五ノ辻稲荷」が表示され、この地域を読み取る目印になります。

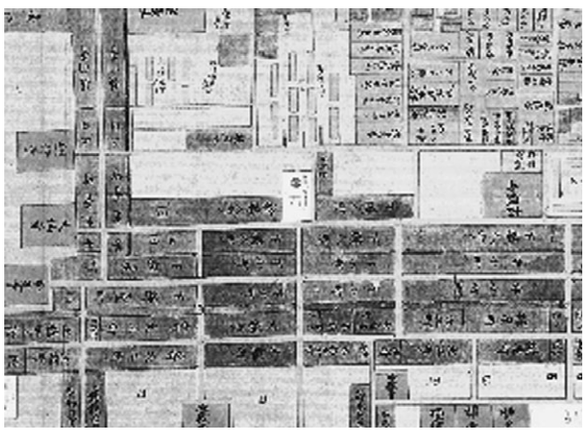


図1-24　江戸時代末期の大町五丁目付近
出所）上越市史「榊原時代地図」

武家社会では、殿様が代ると大きく変化しますが、先の松平光長の時代と比べると武家屋敷が大幅に減っていることが一目瞭然です。

このような変化は大町五丁目にも現れます。通りの東側の五ノ辻稲荷から下手（北側）に「新職人町」という町名が記されています。高田市史第一巻によると、「寛政九年（1797）に下職人町の向かい側の旧家中屋敷に新設された町で…（以下略）」とありました。（西暦は筆者挿入）

五ノ辻稲荷から辻を挟んで上手（南側）の一画は「下職人町」となっており、いつの時点かで武家屋敷から「下職人町」の町人町となったことがわかります。高田市史では、下職人町は「建具指物等木工の職人が多く住んだ。榊原家以前は当町は西側だけであった。」となっています。

⑷　明治時代

明治時代に発行された、「商業地図」をみると、町家一軒ごとの職業も記載されており、まちの様子が一層よくわかります。

この地図では、大町五丁目付近は、幕末期と同じく下職人町と新職人町という表示がなされています。

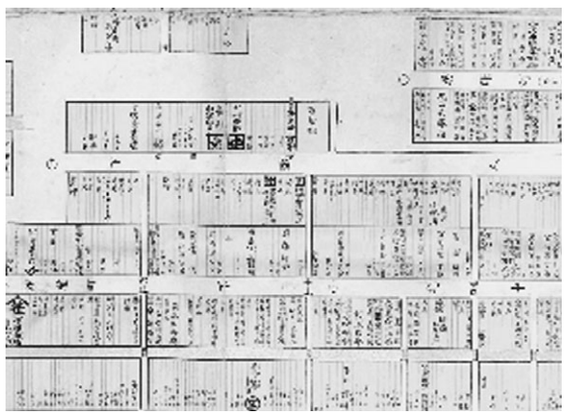


図1-25　明治時代末期の大町五丁目付近
出所）上越市史「商業地図」

⑸　昭和～現在

昭和５年４月１日町名改正時の「新旧対照図」をみると、大町五丁目（その時点での新町名）は、旭町二丁目、三丁目が旧町名として併記されています。この旭町という呼称は五ノ辻稲荷の敷地内にある町内集会施設の名称に「旭会館」として残っています。

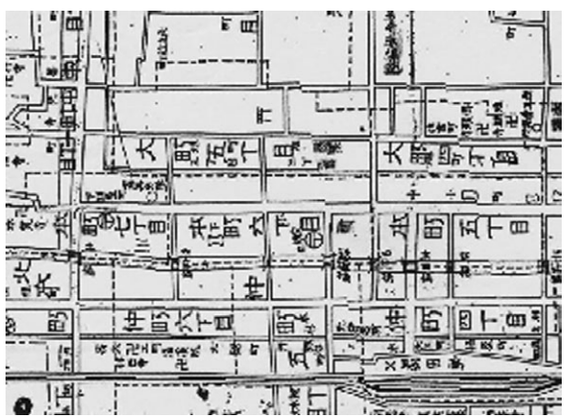


図1-26　昭和初期の大町五丁目付近
出所）「新旧対照図」

図1-27　旭会館

なお、下職人町とセットのように存在した上職人町は大町三丁目に移行しており、現大町四丁目は旭町一丁目から現町名に移行したことがわかります。（一部は住吉町から移行）

市史編さん室にお尋ねしたところ、下職人町から旭町への町名変更の時期は大正５年と判明しました。

ここで私が疑問に思ったのは、上職人町が昭和５年の改正直前まで存続したのに対して、下職人町だけが旭町となった点です。

推察するに、今でも高田地区で使われている相対的に位置を示す「上（かみ）」、「下（しも）」の「下（しも）」が上下（じょうげ）関係の下位という意味にとられ嫌われたのではないかと思われます。

なお、上越市史普及版の「新旧町村名対照表」には、現大町五丁目は旭町の一部とあり、さらに元町名として椀屋町と下職人町、新職人町の各一部とも記載されています。

これを明治43年の「高田市街明細地図」で確認してみると、椀屋町は大町通の一本東側を平行して走る通りの東側の一角を占めている場所であることがわかりました。

また、高田市史で詳しくみると、「東の道路を隔てたところを椀屋町といった。榊原政令時代に塗物師が住んでいたためである」となっており、さらには、この地区の旧町名として御坊町という記載もあることがわかりました。

おそらく、同じ町内でもいくつかの呼び方が重複していたのではないかと思われますが、現段階で筆者としては特定することができませんでしたので、この点は今後の課題としたいと思います。

表1-2　大町五丁目における町名の推移の整理

時　　代	町　名	備　　考
江戸時代中期 （松平光長時代）	下職人町	通りの西側のみで、東側は武士の居住区。
幕末期 （榊原家時代）	下職人町 新職人町	下職人町は、通りの西側と東側の一部。 新職人町は、通りの東側「五ノ辻稲荷」以北
大正５年	旭町二丁目 旭町三丁目	
昭和５年	大町五丁目	現町名

２．明治時代のまちの生業の様子

次に、「商業地図」で、明治時代の高田のまちの生業、つまり職業構成の様子をみていきたいと思います。

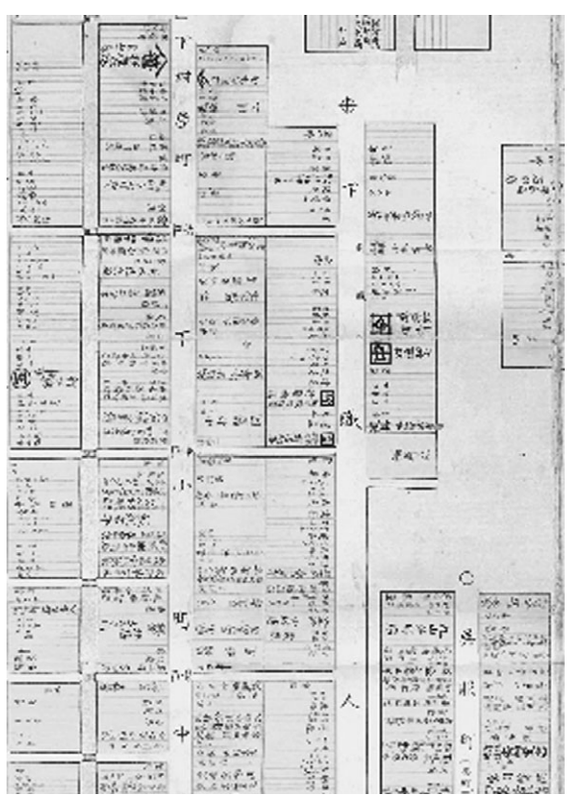


図1-28　明治時代の大町五丁目付近
出所）上越市史「商業地図」

⑴　「資力充実の店」でみるまちの様子

「商業地図」では、緒言三項目の二番目として「営業名の下に屋号若くは姓名を記載せるものは現今資力充実にして最も信用ある営業者なり」となっています。

これは、簡単に言えば、資力が充実していて最も信用がある営業者とお墨付きを得た店舗を列記したものです。

この「資力充実の店」をたどって図上散歩をしてみると、表1-3のような13軒の商店をみることができます。

表1-3　「商業地図」でみる資力充実の店

※五ノ辻稲荷からスタートし、通りを挟んで東側の家並みを北上します。

① 建具井澤倉吉

② 中 紺屋和七

③ 萬染物紺清（商標＝井中に「今」の字）

④ 建具指物小林幸吉

⑤ 高田機業株式会社

※ここで通りを渡り、折り返して西側を南進

⑥ バテン上田分工場（下紺屋町にもあり）

⑦ 竹 和洋織物卸商竹勝商店

⑧ 富 織物卸商有沢商店

⑨ 指物師長谷川半兵衛

⑩ 漆渋　内藤商店

⑪ 料理一寸亭

⑫ 塗師小林店

⑬ 金物金具栗原

「萬染物紺清」とは現在、保存問題で脚光を浴びている旧染呉服店です。このように見てみると、現在場所は変わっても他の地所で同業を継続していると思われる店舗もみることができます。

図1-29「萬染物紺清」と記載されている旧染呉服店

なお、「商業地図」にある現大町五丁目の戸数は91軒です。（前述の13軒を含み、欠落個所と稲荷社は除く）

⑵　営業別一覧

次に、その91軒を営業別一覧でみると、表1-4のようになります。

表1-4　現大町五丁目（旧下職人町）営業別一覧表

建具	17	大工	3
染物屋（含む染工）	4	日雇・人夫	5
バテン	2	トラック	1
機業	1	新聞配達	2
織物卸	2	按摩	2
仕立屋	2	卜考	1
漆渋	1	豆腐屋	2
塗師	2	酒店	1
表具師	1	魚屋	1
指物師	1	米屋	1
カザリヤ	1	料理屋	1
金物・金具	1	靴屋・下駄屋	2
紋書	1	湯屋	1
ちょうちん	1	質屋	1
足袋	1	ヲヤキヤ	1
綿帽子	1	農業	1
痛風散（薬屋）	1	行商	1
読み取り不能	3	記載なし	21
合		計	91

ご覧のとおり「建具」が17軒と群を抜いていますが「染物屋」、「バテン」、「機業」等繊維関係も多くみられます。「ちょうちん」、「足袋」、「綿帽子」、「下駄」などが懐かしい職業が見られる一方で、「トラック」、

「新聞配達」など比較的当時としては新しい業種も見ることができます。

また、米・魚・豆腐・酒が町内で用が足り湯屋も質店も料理屋も町内にあり、按摩さんも二人おられたようでいかにも職人町らしさを感じさせます。

⑶　現在の大町五丁目を歩く

現行の住宅地図と「商業地図」を手に当該地区を歩いてみると、「ちょうちん」とある個所には「洋傘 提燈」の看板があり（図1-30）、「紋書」とある一軒は、現在も「紋章ネーム店」として存続していました。（図1-31）

図1-30　「洋傘 提燈」の看板があるお宅

図1-31　岸波紋章ネーム店

また、「商業地図」にはないのですが「かき紋　ぬい紋　もんや」の看板のある家（図1-32）がありますがすでに商売をやめておられるという話や、創業享保６年（1721）の家具屋さん（図1-33）があるという話も聞くことができました。

図1-32 「かき紋 ぬい紋 もんや」の看板のある家

図1-33　創業享保６年（1721）の家具屋

「商業地図」と比較しての大きな変貌は、カタカナ名のマンションが数軒あること、上越社会保険健康センター（ペアーレ上越）が大きな面積を占めていることです。

3．おわりに

今回の調査では、過去の地図を中心に調査を進めてきましたが、本年２月にとある集会に出席したところ、大町五丁目の町内会長さんや同町内で「商業地図」に登載されたお仕事を現在も継承されている方とお近づきになることもできました。

今後は、今回の調査を通じて知り合うことができた方々のところにお訪ねして、町家のこと、町内のことなどをお聞きし、私なりの高田のまちの物語を描き、町家を活かしたまちづくりに参画していきたいと思っております。

最後となりましたが、現在私は、俳句の団体で活動をしております。私なりの「高田のまちの物語」の表現として、高田のまちや雁木について詠んだ句をご紹介させていただきまして、本稿の筆を置きたいと思います。

雁木から登校の子ら湧くごとし　たかし

職人の正座の見ゆる雁木かな　たかし

門口に赤子を抱いて御輿待つ　たかし

参考文献

・『高田市史』第一巻

・『上越市史普及版』